

■特定課題セッションⅣの報告

「災害対応において今後、社会福祉に求められる役割」

コーディネーター：大島隆代（早稲田大学）

本セッションで大切にしたいと考えていたことは、開催要項の趣旨にもあるが、災害対応や災害支援を通して、「社会福祉」というものを見つめなおし再考するということに軸を置くということであった。大変貴重な実践報告などの応募もあったのだが、その趣旨にかなう報告テーマを選定させていただいたという経緯がある。応募されたかたがた全ての研究や実践に敬意を表し、感謝を申し上げたい。

第1報告の「災害被災者の発災後の『生活変容』及び『生活課題』に対するソーシャルワーク実践のあり方に関する研究」（平野裕司会員）と、第2報告の「東日本大震災からみるコミュニティ再生に向けたソーシャルワークのあり方に関する研究」（安西美咲会員）からは、現場での丁寧な調査研究から、コミュニティにおける諸個人の悲嘆の回復や生活の再生のプロセスには、被災したかたにも支援者にもあるレジリエンスが機能しているということが示された。そして、第3報告の「東日本大震災の子どもへの社会福祉支援の課題」（清水冬樹会員）は、マクロな復興事業という政策のなかで見過ごされがちな課題を、子どもへの支援を切り口として提起し、問題を正確に把握することが社会福祉にこそ課された責任なのではないかと問うた。続いての第4報告の「災害時の福祉対応のあり方に関する検討」（都築光一会員）では、被災者という対象をどのように捉えるかという課題は、実は社会福祉学がその源流から対峙していた対象論にも通じており、誰のための復興なのか、誰のための福祉なのかを問うことの意味が発信された。最後の第5報告の「社会福祉・ソーシャルワークからの『災害論』の検討」（渡邊圭会員）は、社会福祉学で災害対応や災害支援を議論していくのであれば、災害とか支援などといった根源的な概念をどう定義するかの作業を怠っては、被災したかたがたのみならず、支援者や研究者をも不在にしたまま進んでしまうのではないかという危機感も示された。報告後の全体討論では、会場からの質問や意見をきっかけとして議論を展開したが、会場参加の皆様にも報告者にも、この五つの報告に通底するエッセンスをくみ取っていただくことができたのではないかと思っている。

本セッションに関して、事前準備や報告者の皆様との打ち合わせ、大会当日の会場とのコミュニケーションなどを通して、一貫して感じたことがあった。それは、「社会福祉」というものの、「学」として、また、「実践」としての存在意義である。この、特定課題セッションという、誰もが同じ土俵で議論ができるという場が、「社会福祉」を押し上げてくれ、今後のさらなる発展につながるものとなることを願っている。